



しよろこび

カトリック宝塚教会月報 2008年5月号

聖霊よ、来てください、地の面に

主任司祭 ハーン・フランシス

4月の初めにオブレート会の毎年行なわれる春の総会がありました。今年は、司祭が高齢化する現状の中で未来へ向かう方向を話し合いました。5年先、10年先に何人が現役で働いていられるでしょうか。更に現役で働いて収入を得られる人数はどれくらいであるか、などの話し合いでした。今まで、私たちは、幼稚園の園長の仕事や学校で教えたり、社会福祉の活動といった、それぞれの活動を担いながら自分の生活を維持してきました。しかし、今は神父たちの大半が70歳を超えていて昔のように動けないし、年金生活に入っている司祭の生活を補う方法を見つける必要性もあります。また、若い司祭たちの考え方が違って来ていて、社会活動、正義と平和の問題、若者たちのため、などのような仕事に向かっています。そのうえ、日本のオブレート会の管区の数人が減っているのので、近くのアジアの管区と合併されることとなります。

このような現実の前に40年、50年以上日本に働いている司祭が大きな変動、不安定な未来に向かっているのですが、皆は、積極的に、気を落とさずに、前向きに考えました。この不安の中で神さまは話されているのです。もっと私によりすがっていなさいと。

聖霊降臨の主日に向かって歩んでいる私たちは同じ招きを教会中に響かせます。私は復活であり命です。死に打ち勝った主です。安心して私についてきなさい、安らぎを与えよう。私はあなたと共にいるから恐れる必要がない。そして私の息、命、力である聖霊を受けて全世界に行って福音を述べ伝え、父と子と聖霊の御名によって洗礼を受けなさい。あなた方は異語を語り、蛇をつかみ、毒を飲んでも害を受けず、悪霊を追い出し、病人を回復させ、私の名によってすべてに打ち勝ってあまりあるのです。

オブレート会であれ、大阪大司教区であれ、日本のカトリック教会全体であれ、日本の社会と同じような不安を抱いて未来に向かっているのです。高齢化現象、生活の保障、世の中の価値観の激しい変動の中でどうすればよいのか、そのはっきりした答えを求めているのです。しかし、ヨナのしるし以外に他の答えがないのです。すなわちヨナが三日三晩大きな魚の中にいたように人の子がそのようになる、弟子であれば私たちもそうなるのです。

光、真理、道であるキリストは現在の状況の中で話されています。エマオに向かって行ったあの二人の弟子と同様に論じ合っている私たちは、彼らと同じく目が遮られています。キリストが共に歩いているにもかかわらず、気が付かないでいるのです。

聖書、神の約束のことばに触れれば触れるほど私たちの目は開き、特にパンを裂く時に主

が共におられると分かり、元気よく兄弟のところへ飛んで行き、主はまことに復活されたと証しすることができるようになるのです。恐れずに未来へ共に向かって歩みましょう。